

竪穴式茶室「低過庵」

縄文アートプロジェクトの艺术作品として、茅野市出身の藤森照信さん（建築史家・建築家）による新作・竪穴式茶室「低過庵」を制作・公開しました。「高過庵」（茅野市宮川高部）のある敷地に、地元茅野の職人やワークショップ参加者と7～8月に制作し、9月17日に完成披露。9～10月に見学会や公開日を設けて、大勢の方に見学・体験していただきました。



制作ワークショップ

7月23日（日）、30日（日）、
8月12日（土）、13日（日）、19日（土）、20日（日）、
26日（土）、27日（日）
茅野市宮川高部、茅野市民館

低過庵オープン&フジモリ建築見学会

9月17日（日）
茅野市宮川高部

フジモリ建築見学会

10月7日（土）、21日（土）
茅野市宮川高部

「低過庵」公開

10月1日（日）、4日（水）、8日（日）、9日（月・祝）、
12日（木）、15日（日）、20日（金）、22日（日）

トークイベント「人が求める住まいとは？」

10月20日（金）
茅野市民館 マルチホール
出演：藤森照信、藤塚光政（写真家）、
志水りえ（モダンリビング編集長）

制作



制作ワークショップには地元をはじめ県内外から延べ114名が参加。藤森照信さんをはじめ地元宮川高部の大工の皆さんや作業に慣れている市民の皆さんのサポートで、木材を切る、ビスを打つ、銅板を加工する、杉板を焼く、漆喰を塗る……といった作業にあたり、「低過庵」が完成しました。

竪穴式茶室「低過庵」



藤森照信さんのコメント

「江戸時代からの家を小2のときに建て替え、大工さんが住み込み、村の人たちと1年かけてつくった。それで、家というのは自分たちでつくんだというのが今でも自分にはある。プロがやらないといけない部分があるが、仕上げの部分は誰でもやれる仕事がある。片づけとかお屋の用意とか、つまらないとみえるものも大事な仕事。こういったワークショップは自分が何をやっているのか一目でわかる。素人が誰でもできるのと、自分でやっていることがわかる。そういう「ものづくり」のワークショップは結構ないこと」(トークイベントにて)

完成



完成した低過庵は、内部をご覧いただける見学会や公開日を設けて、地元だけでなく県内外から延べ646名の皆さんに体感していただきました。“竪穴式”で半地下の室内は窓がなく、ろうそくの灯りが辺りに揺らめき、炉の暖かさをじんわり感じる、とても静かな空間。スライド式の屋根を窓のように開けると、やわらかな風と外光に包まれ、自然の光の力に驚かされます。



WS参加者のコメント

「中の縞模様の部分を塗ったのですが、ろうそくの光で浮かびあがってとても幻想的だった」
「屋根を開くと軽くなるような感じ」
「自分がつくったところがこんなふうになるんだ。いろんな人に教えてもらって、いいきっかけをもらえた」

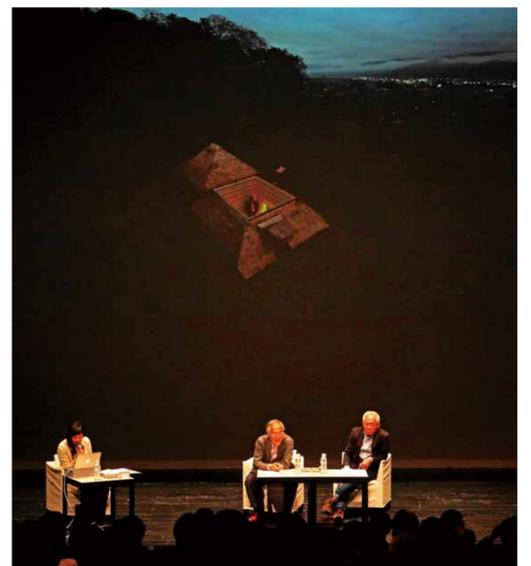
藤森照信さんのコメント

「高いところと違う、土のなかの面白さ。人間がもともと生まれてきた土のなか。明かりがないなかで、ろうそくとか火とかで、その落ち着きのようなものを再現したいという風には考えたんですが、それだけでは面白くないので、土のなかでお茶を飲んだあと、屋根が開いて空がぱっと見えるという。それをちゃんとやることでできて、大変満足です」(低過庵オープンにて)

トークイベント

藤森照信さんと、写真家として藤森さんの建築を撮り続けている藤塚光政さんによるトークイベント「人が求める住まいとは？」では、135名の皆さんにご来場いただき、低過庵を中心に、〈縄文〉〈土〉などのキーワードとともに、「人の居心地のいい場所」についてうかがいました。

会場では、この日藤塚さんが撮影した低過庵の写真を初公開。夕刻、街の灯りが遠くまたたくなか、宵闇にろうそくの灯りで浮かびあがる低過庵の光景に、「この世のものじゃないよう。知らない人が見たら何が起きてるかわからないよね」と藤塚さん。藤森さんも、「土の中から空を見るって体験はしたことがなく、してみたかった。中に入ってあんなに落ち着くと思わなかった。包まれているような感じで、瞑想かと思う」と話していました。



居心地のいい場所とは？

藤森さん「閉ざされた中において、何か大きくひとつ開いている。洞窟の感じ。相当気持ちいいものだと思う」

藤塚さん「狭い空間。家の中に狭いところがあるのが非常に心地いいと思う」